

【桜川】 さくらがは (その2)

こうした親子の修羅をこれら謡曲は表現しているのではないのでしょうか。

『桜川』などのように、生き別れとなった親子が再開を果たすという筋書きの深層には、こうした親子のもつれと親子関係修復の苦勞が表されているのです。

生き別れとなった原因には、父親の殺意により身を隠した『雲雀山』、勘当された『弱法師』など親子のもつれが具体的な曲があります。

他の曲には、子の自発的な出家や人商人による誘拐、身売りなどの原因が見られますが、いずれも親子のもつれが暗示されているように思えます。

『桜川』をはじめ、ほとんどの曲では親子は再会を果たし帰郷します。

しかし『隅田川』は、さらわれた子が病態となり人商人からも捨てられ死に果てて、捜し求めてきた母親の前に亡霊となって現れるという結末です。この曲に修復できなかった親子関係を重ね合わせてみると、悲劇の極みを見る思いがします。

私は某児童自立支援施設の女子寮にて茶の湯の指導をさせて戴いています。

問題を抱え、家庭裁判所や児童相談所から送致されてきた十代の少女達は、施設内の中学校を卒業すると寮を出て各自の道を歩みだします。

その施設での最後の行事として毎年卒業茶会を行っています。お世話になった先生方や保護者の前で一人ひとり点前をしていきます。実は明日がその茶会の日なのです。

この日のために、少女達はいかに熱心に稽古を重ねてきたことか…。例年、点前を終え、思い余って涙を見せる子も珍しくありません。

卒業茶会は、毎年謡曲『桜川』に因む道具を取り合わせています。

掛物は一行「流水送落花」、これは謡曲中にも引用の禅語です。その他、淡々斎好みの桜川棗(写し)、水指に花紋の三島写しなどを使っています。

『桜川』の趣向で茶会を行うのは、時候だけの理由でないことはお察しいただけると思います。親元を離れ寮生活をおくってきた少女達が、茶会の後日、散りゆく桜の下を母親と共に自宅へ帰っていく姿は謡曲『桜川』そのものといえましょう。

茶会が終われば、少女達の幸福を陰ながら祈るしか私にはできません。